

晩夏の佐渡紀行

高橋 祐吉

初めての佐渡へ

昨年9月の2日から6日にかけて、佐渡、富山、金沢と廻ってきた。社会科学研究所が企画した「北前船の足跡をたどる Part3」と題する調査旅行に参加させてもらったのである。私は、Part1には所用があつて残念ながら参加できなかったが、Part2には喜んで参加して旅日記風の雑文を綴り、研究所の『月報』(No.667・668号、2019年2月)に掲載してもらった。秋田、山形、新潟と巡った前回の調査旅行がかなり面白かったので、今回もまた面白い旅になるのではなかろうかと勝手に妄想を膨らませ、再び喜び勇んで出掛けた訳である。何時ものことではあるが、旅に出掛ける動機は相変わらず不純である(笑)。

今回の行程は、過去2回の調査旅行と同様に、一方では北前船の足跡を辿るとともに、他方では探訪した地方、すなわち北陸(新潟、富山、石川、福井)における現代産業の動向についても視察するものだった。例えば、佐渡では地元での雇用創出を願いつつ電子部品を製造しているセオデンテクノ、富山では世界企業でもあるYKKの黒部パークセンター、「越中富山の菓売り」から始まった医薬品メーカーの廣貫堂、包装関連機器を製造しているハナガタ、高岡では鋳物メーカーのイメージを一新した能作、そして金沢では繊維機械を製造している津田駒工業を訪問し、それぞれの企業の方からレクチャーを受け、現場を見学させてもらった。

私はと言えば、その辺りのことについては何も知らないもので、北陸にも面白い企業がたくさんあり、いろいろなものが作られているんだなあと感心して見て廻った。私の頭にあった北陸のイメージが一新されたことは言うまでもない。他にも、佐渡ではトキの森公園内にある佐渡トキ保護センターや、真野鶴の蔵元である尾畑酒造や、佐渡産の陶器として知られる無名異(むみょうい)焼きの窯元なども訪ねた。無名異とは酸化鉄を含有する赤土のことで、佐渡の金山採掘の際に出土したため、その副産物を陶土に利用して焼かれるようになったのだという。富山では、コンパクトシティを理念とした街作りの実験に関する話も聞いたし、LRTと呼ばれる次世代型路面電車システムの姿を知るために、この電車にも乗車した。

しかしながら、感心し楽しんだまではいいのだが、こうした副産物に関する事柄については、探訪記を書こうとする意欲が沸いてこない。何故かと言えば、私が書きたいのは調査旅行に出掛けて体感した旅情とか旅愁とか旅心のようなものだからである。社会科学研究所の『月報』にそんなことを書いてどうするのかと所長や事務局長からお叱りを受けそうだが、その程度の

ことしか書けないし、またそんなことを書いてもみたいので、年寄りの我が儘だと思ってお許し願いたい。

今回主に書きたいと考えているのは、佐渡に関するあれこれである。佐渡は今回初めて出掛ける場所なので、行く前から楽しみにしていた。昔ゼミ生たちとの卒業旅行で佐渡に渡る企画があって、直前までそのつもりで準備していたのだが、前日に酷い腰痛を発症したために断念した。そんな日く付きの場所でもある。だから、是非一度出掛けてみたかった。陸地の果てをイメージさせる岬などにも人は旅情を感じるはずであるが、島に向かう船旅となると、その思いは更に深くなるのではなからうか。そんなことを期待して出掛けた訳である。

同行の諸氏とは新潟駅で待ち合わせということになっていたもので、珍しく朝早くに起きて一人上越新幹線に乗車した。旅というのは、事前に計画を練っている時も楽しいが、それ以上に興奮するのはやはり目的地に向かう時ではなからうか(笑)。日常を離れることが、目に見えて分かるからである。燕三条を過ぎると列車は越後平野の真ん中を走って行く。車窓から眺めると田圃が一面に広がり、その広さにあらためて驚いた。さすが日本一の米どころと言うべきか。小雨に煙っている所為もあるのか、緑、黄緑、黄色のグラデーションが何とも美しい。

見ず知らずの場所に出掛けると、事前にあれこれの知識を仕入れておこうなどといった殊勝な気になる。今回も同じである。加えて簡単な雑知識も頭に入れておいたつもりだった。しかしながら、実際に出掛けてみると大分感じが違う。新潟と佐渡の両津との間には高速のジェットホイルが就航しており、僅か1時間程で着く。昔流人の島だったところがこんなに近いとは思ってもよらなかった。

船中で法学部の根岸さんと雑談を交わしたが、その際彼は、太宰治が佐渡について書いていることを紹介してくれた。その作品についてはこの後すぐに触れる。根岸さんとの雑談で、彼が能を観るために結構な頻度で佐渡に来ていることを知って、私はいたく驚いた。能などといった高尚な趣味のために、佐渡にまで出掛ける人がいるのである。世俗の塵埃にまみれた私のような人間には、にわかには信じられない話だった。世界は何と広いのであろうか(笑)。

佐渡は、世阿弥が配流された地としてよく知られており、そうした歴史もあって能が盛んな地となったのであろうなどと勝手に思い込んでいたが、後になってこの原稿を書くためにガイドブックの類を読み直していたら、そこには、佐渡に能が広まったのは江戸時代の初めであり、幕府から金山開発の命を受けて初代の佐渡奉行となった大久保長安が、二人の能太夫を連れて佐渡に来たことに始まると書いてあった。この二人の能太夫は長安が江戸に戻った後も島に残って多くの弟子を育て、それが島内での民間能の礎を作ったのだという。

それどころか、江戸時代の佐渡は天領となったので、大名も武士もない特殊な環境であったため、武士の式楽(儀式に用いられる音楽や舞踊のこと)であった能が、島民にも浸透して

いったと考えられること、佐渡の能がもっとも盛んだった明治時代には、島内には村の数と同じ 200 ほどの能舞台があったこと、神事から庶民の娯楽という側面を持つに至った能は、佐渡の人々に愛され続け、現在でも 36 の能舞台が残されていること、この数は日本にある能舞台の三分の一を占めていること、などまで触れられていた。

こうしたことは、佐渡に関心を持つ人にとっては常識であり、今更の話なのかもしれない。私はそんなことも知らずに佐渡に向かったのであるが、もともと非常識な人間なのでやむを得ない(笑)。先のガイドブックには、主な能舞台のスケジュールまで紹介されていたから、能を観るために島外から佐渡に出掛ける根岸さんのような人は、案外いるのかもしれない。

描かれた佐渡を読む

「描かれた佐渡を読む」などと大層なタイトルを付けたが、ここで私が試みたいのは、佐渡に出掛けた文学者たちが、そこで何を体験し、何を感じ、何を思ったのかを紹介することである。先程冒頭のところで、島への旅には特別な旅情が沸くのではないかと書いたが、その感じは誰しも同じであろう。歴史的な由緒のある佐渡であれば尚更であるに違いない。だから、佐渡には一度は行ってみたい、行かねばならないといった気持ちに囚われて、多くの文学者たちが佐渡に向かったのではないかと思われる。

以下に取り上げるのは、佐渡に出掛けた、あるいは佐渡出身の文学者たちが記した紀行文であり、写生文であり、エッセイであり、著作である。もちろん全部など読めはしないから、私が目にして興味を持ったものだけをアトランダムに取り上げている。また、紹介している文章も、わずかの繋がりぐらいい意識したもの、基本的にはアトランダムである。注目すべきは、彼らの佐渡の歩き方であり、そこから見えてくる彼らの旅の形である。

●太宰治の場合—何もない寂しい佐渡—

さて、まずは根岸さんの話に出てきた太宰治の作品であるが、私も彼の「佐渡」(1941年)と題した小品には目を通しておいた。どこでその作品を知ったかという点、『ふるさと文学館』の第19巻(1994年、ぎょうせい)が新潟編となっており、そこに収録されていたからである。「佐渡」には読み始めるとすぐにこんな文章が登場する。

何しに佐渡へなど行くのだろう。自分にも、わからなかった。十六日に、新潟の高等学校で下手な講演をした。その翌日、この船に乗った。佐渡は、淋しいところだと聞いている。死ぬほど淋しいところだと聞い

ている。前から、気がかりになっていたのである。私には天国よりも、地獄のほうが気にかかる。(中略)新潟まで行くのならば、佐渡へも立ち寄ろう。立ち寄りなければならぬ。謂わば死に神の手招きに吸い寄せられるように、私は何の理由もなく、佐渡にひかれた。私は、たいへんおセンチなのかも知れない。死ぬほど淋しいところ。それが、よかった。お恥ずかしい事である。

「何しに佐渡へなど行くのだろう」と自問自答する太宰の姿勢は、最後まで変わらない。読み進めると、両津の旅館では以下のようなことを感じたと言われているし、翌日出向いた相川でも、似たような描写が続く。

夜半、ふと眼がさめた。ああ、佐渡だ、と思った。波の音が、どぶんどぶんと聞える。遠い孤島の宿屋に、いま寝ているのだという感じがはつきり来た。眼が冴さえてしまって、なかなか眠られなかった。謂わば、「死ぬほど淋しいところ」の酷烈な孤独感をやっと捕えた。おいしいものではなかった。やりきれないものであった。けれども、これが欲しくて佐渡までやって来たのではないか。うんと味わえ。もっと味わえ。床の中で、眼をはつきり開いて、さまざまの事を考えた。自分の醜さを、捨てずに育てて行くより他は、無いと思った。障子が薄蒼くなって来る頃まで、眠らずにいた。

佐渡には何も無い。あるべき筈はないという事は、なんぼ愚かな私にでも、わかっていた。けれども、来て見ないうちは、気がかりなのだ。見物の心理とは、そんなものではなからうか。大袈裟に飛躍すれば、この人生でさえも、そんなものとも言えるかも知れない。見てしまった空虚、見なかった焦躁不安、それだけの連続で、三十歳四十歳五十歳と、精一ぱいあくせく暮して、死ぬるのではなからうか。私は、もうそろそろ佐渡をあきらめた。(中略)白屋の相川のまちは、人ひとり通らぬ。まちは知らぬ振りをしている。何しに来た、という顔をしている。ひっそりという感じでもない。がらんとしている。ここは見物に来るところでない。まちは私に見向きもせず、自分だけの生活をさっさとしている。私は、のそのそ歩いている自分を、いよいよ恥ずかしく思った。

こうした如何にも太宰らしい心象風景が連綿と描かれているのだが、「佐渡には何も無い」し、「死ぬほど淋しいところ」だと繰り返して書かれているようなエッセーを、佐渡の人は余り読みたくもなからう。余計なお世話だと思ったかもしれない(笑)。旅館の女中や、夜に出掛けた料亭の女給にも好印象を抱かなかったようで、その所為か、文末には作者後記として「旅館、料亭の名前は、すべて変名を用いた」とわざわざ書かれている。何ともあしざまに描いたので、太宰もさすがに気になったのであろう(笑)。

太宰のことだから、もしも佐渡の女性に好印象を抱くことができたのであれば、印象はもう少し違ったものとなったのかもしれない。これは私の勝手な思い込みではあるのだが…。旅の印象は、出掛けた場所の風物や飲み食いしたものに大きく影響されるのは言うまでもなからうが、土地の人の印象にも結構影響されるところがある。私なども、ちょっとした言葉の遣り取りに心が和むことがよくある。太宰のような寂しがり屋であれば、尚更であろう。

●井上靖の場合－難行苦行の佐渡－

先の『ふるさと文学館』の新潟編には、井上靖の「大佐渡小佐渡」も収録されている。この紀行文もなかなか面白かった。私はこれを『ふるさと文学館』ではなく、岩波書店の同時代ライブラリーに収められた彼の『日本紀行』（1993年）で読んだ。この紀行文は、彼が1953年に冬の佐渡を見るために出掛けた時のものである。同行したのは、評論家の福田恆存と文藝春秋社の社員である田川氏の三人である。

作家の書いた紀行文なのだから、当然ながらあちこちに井上の美意識にもとづく鋭い観察が散りばめられており、それはそれで面白いのであるが、私が出向いてもいない場所について触れてもみても仕方がなからう。それよりも、この紀行文の面白さはまったく別なところにある。

佐渡での彼らの案内人となったのは新潟日報の坂井という記者であるが、この人がやたらに熱意溢れる精力的な人で、著名な井上や福田に佐渡の隠れた魅力を知らしめようと、目一杯あちこちを見て回ろうとするのである。佐渡守とまで称された彼の性癖でもあるのだろう。そのために、一行はへとへとに疲れ果て、井上たちの旅は難行苦行の連続となる。雪まで降った寒い冬の佐渡で、朝から夜まで引っ張り回されたのだから、さぞかし大変なことであつたろう（笑）。井上はこんなふう書いている。

12時過ぎて坂井さんを玄関に送って行くと、まだ雪が降っている。「明日は、早く起きておいて下さいよ、でないと廻り切れない」坂井さんは言い残して出て行った。坂井さんは私たちにこままわらず勝手にスケジュールを組んでいるらしい。（中略）「いづれにしても用心しなければ」スケジュールのことを心配しているのは田川君である。佐渡へ来たからにはどうしても見なければと言って、坂井さんの挙げてくれた箇所は相当な数に上っていたからである。後で新潟に帰って新聞社の若い記者たちに坂井さんのことを話すと、「あの人のことは坂井佐渡守と言っているんですよ」と言った。

そこ（正法寺）を出ると、みんな自動車になだれ込む。堪らなく寒い。（中略）私も田川君もひどく疲れている。水が靴にしみ込んで足指が感覚を失っている。（中略）両津の宿につくと、一同ぐったりする。同じようにぐったりしていても、坂井さんはあくまで坂井さんである。「じゃあ、ひと思いに出掛けましょう」決して自分のスケジュールを崩さない。

こうして井上だけが坂井さんに引き連れられて、さらにある人物を訪ねるために、懐中電灯を頼りに山道を歩くのである。何とも恐れ入った強行軍である。善意に溢れた人の怖さであろう。私ならとうに音を上げている（笑）。井上は、『日本紀行』の始めの方で、『旅と人生』について」と題したエッセーを書いている。

旅の効用をただ一つあげよといわれれば、私は躊躇なしに、自分をひとりにすることができることだと思う。自分をひとりにするには旅が一番てっとりばやい。決まりきった生活の枠は取りはずされ、まったく違った時間が自分の周囲を流れ出す。道の風物人情が自分を取り巻き、しかも停滞することなしに次々と後方に移動してゆく。否が応でも旅行者はひとりにならねばならぬ。

彼は、「ひとりになって初めて人間はものを考える」のだと強調しているのだが、ここで考えるということは、勿論仕事の一部としての行為ではない。「仕事には無関係に、つまり考えなければならぬので考えるのではなく、もっと自由で、もっととりとめもなく、自分の心の中に現れてきたものを追うこと」が大事なのだが、「そうした時間を持てるのは、今や旅でしかなさそうだ」と彼は書いている。同感である。もしかしたら、取材を兼ねて出掛けた佐渡での苦い体験が、こうした認識を強めたのかもしれない(笑)。

●青野季吉の場合－生まれ故郷の佐渡－

ところで、先の井上靖は新潟から佐渡に向かう船内で、青野季吉の『佐渡』(小山書店、1942年)を読んだと書いている。随分古い本だが今でも手に入れることができる。青野季吉は佐渡の佐和田の生まれで、プロレタリア文学に関する文芸評論家として著名であり、「種蒔く人」の同人でもあった人物である。佐渡の歴史に関する叙述も多いこの本は、今読んでも大変興味深いし、また佐渡の風土というものを知るうえでも役に立つ。彼は冒頭で、芭蕉のあまりにも有名な句「荒海や 佐渡に横ふ 天の川」が佐渡の印象を形作るのに大きな役割を果たしたと述べている。

この句が残す観念は、荒海に向ふに浮かんだ流人の島と云う寒々とした形を植ゑつけないではおかない。句の構成から云っても、荒海と天の川と云う廣大無邊の自然のなかに、佐渡と云う限定された存在が、ぼつと配置されているのだから、その観念が刻まれるのは、當りまへである。(中略) 言ってみれば、荒海やの句の魔力が、佐渡の絶海の孤島感を、ひとり勝手にひろめて止まないのだ。

「絶海の孤島」とまでは思わないにせよ、わたしもまたどこかにそんな印象を抱いてきたので、なるほどと独り合点した。著名な藝術作品が与える印象というのは、想像以上に大きいのもかもしれない。しかしながら、そうした印象は現実の佐渡とは違っている。彼は佐渡の大きさに関して、以下のようなことを書いている。

佐渡をはじめて観る人が、その意外な「大きさ」に驚くのは、船上で大佐渡、小佐渡の連山を眺めた瞬間だけではない。いよいよ船が夷港(現在の両津港のこと一筆者注)について、周囲四里餘の加茂湖を観た

り、それにつづいて打ちひらけた国仲平野を観たりすると、改めてまた別種の意外感を起こさないものはない。

今回の場合ある程度の予備知識を得て出掛けているので、意外感はかなり小さいものの、バスで廻っていると島にいるような感じはまったくしない。それだけ広いのである。日本列島でもっとも大きな島であり、その面積は東京 23 区に匹敵するというのであるから、島を感じなくて当然であろう。

他にも紹介しておくべきことは多々あるが、私が興味を持ったのは、終わり近くや後記で披瀝されている彼の感懐である。私もまた指摘されているようなことに関心を抱いているので、いたく心が惹かれたのであろう。どこかで自分自身を見出したいと思って書くこの雑文なども、きっとそうしたものに違いない。

私の目は、古い佐渡、ないしは不易の佐渡へもっぱら向けられて来た。これは、いまの私の願望、二つとない故郷をあらたに見出したいと云う願望が、おのづからとった姿勢である。ひとは、そう云ふ願望に駆られる時、まづそこに目を凝らして、故郷と云ふものを造形しないではをれない。自己を喪失した個人が、あらたに自己を見出そうとする時、まづ彼の家や血の系譜に分け入らうとするのと同然である。

私は佐渡に生まれて、佐渡を喪った一人だ。しかし喪ったことは、忘れたことではない。(中略) この書で私は、主題によって、語りかける相手をかへた。故郷の人に、他国の人に、或は目に見えぬ何者か。半ばは主題がそう命じたのだ。しかし結局、私は自分自身にしか語らなかつた。喪った故郷を再び見出し度いと云うのが、このを書をかく念願だったからだ。

●若林真の場合－離脱し回帰する佐渡－

他に誰か佐渡について面白いことを書いている人はいないかと、暇にまかせてあれこれ探してみた。私は故郷の福島に関する本だけではなく、新潟に関する本も少しは持っている。母が新潟の出雲崎の出身だからである。その一冊に「再発見！新潟ガイド」と副題の付いた『文学風景への旅 上』(考古堂、1989年)があり、パラパラと眺めていたら「佐渡の文学風景」という章があった。そこを読んでいたら、両津生まれのフランス文学者である若林真の『海を畏れる』(文藝春秋、1973年)や長塚節の「佐渡が島」などが紹介されていた、

『海を畏れる』は先に紹介した青野季吉の『佐渡』と同様の趣で書かれているようで、「海に囲まれた佐渡を世界における島国日本に比定し、佐渡出身の一知識人の故郷離脱と回帰との想念を文明批評と重ね合わせて書いた小説で、佐渡の文学風景のびっしり詰まった小説」であると紹介されていた。私のような人間がすぐに飛びつきたくなるような紹介文である(笑)。早速

入手してパラパラとページをめくってみた。こんな箇所がある。

四郎治の言うとおり、時の権力に容れられなかった芸術家、僧侶、政治家の史跡がこの辺りには多かった。古希を過ぎた世阿弥が、都を偲びつつ、荒れはてた草庵で、観る人もないのに自作の曲を謡い、舞っていたと伝えられる正法寺、鎌倉幕府の勘気に触れた日蓮が二年もの蟄居を強いられた妙照寺、承久の乱に敗れた順徳上皇の配流の居であった黒木御所、これらの史跡はいずれも、いまハイヤーを走らせている幹線道路からほど遠からぬところにあり、小学校や中学校の遠足といえば、きまってこのような史跡だった。

「この島の連中は阿呆だよ。世阿弥だの、日蓮だの、順徳院だのを、島が生み出した偉人のように錯覚して、さかんに吹聴しとるが、そういう流人たちの誰が、ほんとうにこの島を愛したというんだ。彼らはみんな、一日も早く、島を逃げ出そうと、そればかり願っていたんじゃないか」/四郎治の毒舌がまた始まっていた。

確かに「毒舌」ではあるが、なかなか的を射た的確な「毒舌」ではある。ところで、ここには世阿弥が登場しているので、話のついでに彼についても触れておこう。後に触れる佐渡の郷土史家である磯部欣三にも『世阿弥配流』（恒文社、2000年）と題した著作があるし、青野の『佐渡』にも、「佐渡の世阿弥」と題する章が設けられてかなり詳しく触れられてる。彼の生涯を辞典風に紹介してみると、おおよそ次のようになる。

室町時代の能役者、能作者で観阿弥の長男。12歳のおり、父とともに將軍足利義満に見出されて殊遇を受けた。22歳で父は死ぬが、観阿弥の大成した能をさらに幽玄の能として完成させた。義満が没し、義持が田楽の増阿弥を寵愛してからは不遇の身となり、義教が將軍となってからはことに弾圧を受け、嫡子十郎元雅の没後、大夫を甥の音阿弥に譲らされて、佐渡に流された。その後島で没したのか帰洛したのかは不明。

世阿弥は、義満の寵愛を受けながら不遇の身となり、長男も亡くして佐渡に配流され、8年余りの間島での暮らしを余儀なくされるのだが、その後の行方については不明というのである。配流されたのは、今の私と同じ72歳ということだから、当時であればかなりの高齢の身である。教科書にも登場するような歴史上の人物であるが、その芸術家の生涯は、政治の世界に翻弄されて余りにも波乱に富んでいる。そんな彼だからこそ、配流された佐渡で何を考えていたのかが気になる。

先の「毒舌」では、「彼らはみんな、一日も早く、島を逃げ出そうと、そればかり願っていた」と述べられているが、こと世阿弥に関しては違っているかもしれない。彼は佐渡で『金島書』（金島集ともいう）を書いているが、青野によれば、『金島集』の世阿弥に第一に目立つのは、ほとんど無関心とも云う可き平静さで自然の景物や、歌枕や、見聞に向かつてゐることだ」と

言う。観世太夫の座を長男に譲って出家したにも拘わらずその長男が客死するに及んで、既に絶望の淵を覗ききっていたからなのかもしれない。

「我雲水の住むに任せて、そのままに、衆生諸仏も相犯さず、山は自つから高く、海は自つから深し、かかりつくす、山雲海月の心、あらおもしろや」とまで書くところを見ると、世俗的な執着からは離れ、超越し達観していたようにも思われる。思うに、そうでもなければ、80歳まで島暮らしを続けることなど不可能だったのではあるまいか。いかにも本物の芸術家らしい老残の身の処し方であり、生きる構えであると言うべきだろう。

●長塚節の場合－美人のいた佐渡－

ではもう一人の長塚節の場合はどうだろう。彼は1907年に「佐渡が島」という紀行文を書いている。長塚節は小説『土』でも知られるアララギ派の歌人であるが、『日本近代文学大事典』によると、この「佐渡が島」という作品は写生文を得意とした彼の佳作の一つだという。ネット上の「青空文庫」で読むことが出来るので、早速読んでみた。それによると、この文章は彼が相川や真野を経て小木に向かうところから書き始められ、小木から赤泊へ至り、そして赤泊から佐渡を離れ新潟の寺泊に着くところで閉じられている。

彼は、「佐渡は余がためには到底忘れられぬ愉快な境であつた」とか、佐渡は「到る所余がために裝飾されて居るかとも思はれる。外見は凡そ佐渡ほど寂びた所は少なからう。然しながら仔細に味はうて見ると余はまだ佐渡ほど美しい分子を有して居る所に逢うたことがない」とまで書いている。大変な好印象を抱いた旅だったのであろう。その理由は、読んでみるとすぐに分かる。最初の章には次のような文章がある。

小木の港へ辿りついたのは黄昏近くであつた。相川の町では木賃のやうな宿へ泊つて流石に懲り／＼したのであつたから此所では見掛の一番いゝ宿へ腰をおろした。女が表の二階へ案内する。廳でランプを点けて来る。室内が急に明るくなる。此宿はまだ建築して間もないと見えて木柱から畳から頗る清潔で心持がよい。掃除したランプのホヤが殊に目につく。女は更に茶を出して呉れる。氣がついて見ると此女は驚くばかりの美人であつたのだ。まだ二十には過ぎまいと思ふ。佐渡のやうな豫想外に淋しい島へ渡つてこんな美人に逢はうとは全く思も掛けぬ所であつた。美人といふ以外に此女を形容の仕様はない。

節は小木で会ったこの女性にいたく惹かれたようで、次の章のタイトルはそのものずばりの「美人」となっている。余りにも分かり易すぎるタイトルではある（笑）。この女性は、あることを思いだして笑うのであるが、それを見て節は次のように書いている。さらに彼は、赤泊から寺泊に向かう船上でも彼女の事を思い出している。

余は思はず女を見ると女も同時に余を見た。見た目にはまだ笑を含んで居る。余等は二尺計に開けた雨戸の間から躰の擦れ合うた儘外を見て居たのである。向き合うて見るとあんまり近いので急に何だか面ぶせに感じたので余は視線を逸らして其口もとを見た。口には鮮かに紅がさしてある。余は此の如き場合の経験を有して居らぬので只兀然として女のいふことを聞いて居るのである。女は只無邪氣に耻らふ所もないやうな態度である。それ丈余は更に平気で居憎い氣持がした。

佐渡が島では小木の港で美人に逢うた。美人は鼠地へ金糸銀糸で刺繡つた牡丹の花である。さうして博勞の娘はつやゝかな著莪の葉へ干した染糸で刺繡つた蒼でなければならぬ。美人は夜ちらりと見て朝は別れてしまったので何といふ名かそれも知らぬ。宿屋の娘であつたか女中であつたかそれもしかの判断は出来ぬ。余は何故匆卒に其宿を立つてしまったのであつたかとそれとも分らぬ。毎日々々不快な宿を通げるやうに立ち去るのが旅中幾十日の習慣になつて居たからであつたらう。然し兎にも角にも昨日の浦を見おろしながら美人と嘶をした。其嘶は飽氣なかつた。惜しいはかないやうな思が心の底に潜んで居る。牡丹の花のうらを返して見ると金糸銀糸は亂れて居る。余が美人を憶ふ時には心に幾分の亂を生ずる。其心の亂れは刺繡の金糸銀糸が亂れて居る如く只美しくあるべき筈の亂れである。余はかういふ想に耽りつゝ船が磯へ掻きあげられるまで荷物と草鞋とを手を提げたまゝ呆然として立つて居た。

旅すがらの美しい写生文もいいが、それは直接「佐渡が島」に当たって味わってもらふことにして、私は節の女性に対する思の深さの方に興味を覚えた。遠く佐渡まで旅に出たことが、そうした感傷を深くしたことは言うまでもないが、この女性の存在無くして、彼の佐渡に対する好印象はなかつたはずである。出会った人間によって旅の印象はかなり左右されるのであつて、これはその好事例である(笑)。そんなことを書いている自分はいったいどうなんだろうなどと考へてみたが、恐らく同じだろうと思つて苦笑した。

●江口渙の場合—過酷な労働と粗食の佐渡—

佐渡の女性に対する関心ということでは、同じ「佐渡ヶ島」というタイトルで江口渙が書いている紀行文も、取り上げておかなければならないだろう。彼はプロレタリア文学の世界で著名な人物なので、女性への関心とは言つても長塚節の場合とは大分違つている。『日本プロレタリア文学集』34巻はルポルタージュ集となつており、そこに収録された彼の作品を読むと、相川の金山で働く女性を次のように描いている箇所がある。

往來の真中で若い女が男にまじつてしきりに鶴嘴をふるつて居る。その横を、多分上の飯場へでも運ぶのだろう。矢張、若い女が米俵を一俵ずつ背負つて列をつくつて通つていく。それがみんな日本人には珍しいほどの、素晴らしい体格の持主ばかりだ。「この女衆はみんなここから一里ほど北にある海府から來るとるんですわ。海府の女衆は実に好く働きます。」

丈はみんな五尺三四寸はある。そして好く盛れ上った乳の形と、強く張り切った腰の線とが、ひろい肩と部厚な胸とにしっくり合って、全身から受ける感じがまさに若さと健康そのものである。その上、脛と腕とを長い紺の脚絆と手甲でかため、紺飛白(かすり)の筒袖を膝よりも短く着て、赤のまじった半幅帯をぎりっと締めたその上から、腰までしかない紺飛白の袖無しを分厚く着込んでいる様子は、働く婦人にか見られない素朴な美しさが、如何にも力強く溢れていた。

だが、若い間の異常に過激な労働と粗食のために、これほどの体をしながら三十歳を超すともうめきめき衰えてしまうと聞かされた時には、その豊かな肉体から与えられた力強さと明るさは、忽ち私の心から消えて、矢張、彼女達も、このままでは階級的制約の暗さから脱れることの出来ない宿命にあることを、考えざるを得なかった。

この作品は 1934 年に書かれているのだが、鉱山で働く女性たちの「素朴な美しさ」を奪っていく「過激な労働と粗食」に着目していて興味は尽きない。労働の世界に関しては、後でまた取り上げたいと思っているので、ここでは分岐点とされている 30 歳に関連して次のことだけ紹介しておきたい。

江戸時代の水替え人夫たちが過酷な労働に従事していたことはよく知られているが、「金堀り大工」たちも烟毒と呼ばれた塵肺によって 30 歳ぐらいまでしか生きられなかったらしい。三浦豊彦の『労働観のクロニクル』(財)労働科学研究所出版部、1996 年)は、佐渡奉行を務めたことのある川路聖謨(かわじ としあきら)の佐渡在勤中の日記に次のようなことが記されていることを紹介している。

当国は二十五歳に相成り男は賀の祝ひあり。厄年と申候にはあらず。以前は金堀大工に三十をこへ候もの稀也。よって二十五歳になれば、並みものゝ六十位のこゝろへにて歳のみわいたし候由、昔は金ほり計り也しが、今は一国なべてなす事と成りしと御目付役のもの申聞候。

つまり、佐渡では金堀大工は烟毒のために若死にして 30 歳を超える者は稀だったので、25 歳になれば 60 歳にもなったようなもので、歳の祝いをするようになった。それがやがて佐渡一国の風習になったという話である。どれほど過酷な労働であったかが分かるというものである。

金山の町相川を巡って

描かれた佐渡については、江口が描いた鉱山で働く女性たちの話で終えることにして、ここからは現実の旅に戻ることしよう。私が旅情を感じたのは、江口渙が触れていた金山の町相川であり、小木地区にあると民俗博物館と千石船の集落宿根木である。まずは相川から取り上

げてみる。相川は、かつては新潟県佐渡郡の寒村に過ぎなかったが、江戸時代に入って金山で賑わい、ここに佐渡奉行所が置かれたことからわかるように、佐渡の中心地となった。明治以降は鉱山町としての性格に加えて、佐渡観光の町として栄えたが、行政区域としての相川町は2004年の佐渡全域の合併によって消滅し、今は佐渡市の一部になっている。

初期の鉱山集落は、採掘場にほど近い山中で始まりそれが上相川となる。その後、金銀の鉱山が発見されて間もない1603年（慶長8年）に、それまで島根の石見銀山を治めていた大久保長安が初代の代官（のちの佐渡奉行）に任命される。その彼は、相川で大規模な「町立て」（計画的な町づくりのことか）を行い、段丘の先端に奉行所を置き、鉱山と奉行所を結ぶ道路や港を整備する。その結果、道沿いには町家が所狭しと並び、大きな賑わいを見せることになる。これが下町、上町と呼ばれる地域である。

鉱山の採掘が本格化するにもなって各地から大勢の人が流入してきたため、17世紀前半の最盛期には相川の人口は5万人ほどにも達したらしい。当時国内有数の都市であった長崎に匹敵するような人口の規模である。こうして、寒村だった相川は大都市へと変貌していく。相川でわれわれを案内してくれたガイドの方の話にもあったが、相川は江戸時代の町作りが基礎となっているので、今でもあちこちに往時の名残を目にすることが出来るという。町並みを散策するといたって静かな佇まいであるが、往時の繁栄を知ったうえで周りを眺めると、その栄枯盛衰のあまりの大きさに今更ながら驚かされる。その落差が佐渡を寂しい島と感じさせるのかもしれない。

なお、金山の開発にもなって、島全体が江戸幕府の天領つまり直轄地となる。更に付け加えておけば、明治以降も採掘は続けられており、直径50mにも及ぶ巨大なシクナー（泥状の鉱石を水と砂に分離する装置）や東洋一の規模を誇った北沢浮遊選鉱場（浮遊剤を使用することによって金銀を浮かべて分離し、金銀の絞り滓からさらに金銀を回収した装置）が作られ、鉱石や石炭などの運搬のために用いられた大間港が築港され、トロッコをはじめとする近代的な鉱業施設が導入された。その結果、1940年には佐渡の金銀山の歴史の中で最大となる年間1,537kgの金が産出されることになる。

佐渡の金山というと、何も知らない私などはつつい江戸時代の話として受け取りがちである。松本清張の「佐渡流人行」の影響もあるのかもしれない。水替え人夫として使役するために佐渡に送り込まれた無宿人の話が、やけに印象深いからである。しかしながら、上記のような近代化遺産の数々を眺めていると、こちらにも深い郷愁を誘われることになる。江戸時代の話であれば歴史として受け止めているだけでいいのだが、近代化遺産となるとそうはいかない。日本の近代化に大きな役割を果たしたものの、今はうち捨てられている施設を眺めていると、つい先だっこのことのような気がして何とも切ない気分になる。絶好の撮影ポイントではある

のだろうが、浮き浮きした気分でカメラに向かう気にはなかなかないのである。

私の手元には『ニッポン近代化遺産の旅』(朝日新聞社、2002年)と題した写真集があり、そこには「佐渡島の眠れる遺産」ということで、大間港の小さなトラス橋(三角形の部材を組み合わせた橋)の写真が掲載されている。実際に現地で眺めてきたので、それだけでも興味深かったが、注目したのはこの写真集の冒頭に置かれた「近代化遺産とは何か」というかなり長い論考である。筆者は、建築技術史専攻で当時国立科学博物館の研究室長であった清水敬一という人である。その彼が次のような味わい深い文章を書いている。

人は、誇るべきなにかをもつことが必要だろう。人のみならず、国でも地域でも企業でも同じだ。近代化遺産は、激動の近代という時代を乗り越えてきた先人たちが残した遺産。たとえ国の文化財として水準に達していなくとも、地域なり企業なりにとっては、特別な思い出や意味のある場合も多い。単なる老朽施設が歴史的な資産となり、訪れる人に感動を与えるなものかをもつようになるのは、そこにまつわる「物語」が意識されたときなのである。近代化遺産は、このような意味から「地域あるいは市民の文化財」ということもできよう。

この本では、日本に残る近代化遺産のなかから、主要なものを選んで、短い解説をつけた。もちろん近代化遺産は、ここにとりあげたものだけではない。およそ人の営みや生業(なりわい)が続いてきた場所になり、どこにでもある。町を歩いているとき、ふと見かける古い工場や倉庫、鉄道施設、橋梁…これらも立派な近代化遺産なのである。

鉱山のその後についても一言触れておくと、徐々に採掘量が減少したため、1950年代前半には大規模な人員削減が行われ、家族を含めて約2,000人が島を離れることになったのだという。1970年からは「史跡佐渡金山」として観光へと転換し、1989年には休山となった。この「史跡佐渡金山」の世界遺産への登録をめざして、現在さまざまな活動が続けられているのだが、この辺りの話しについては、相川の近くにある市の施設「キラリウム佐渡」を訪問し、職員の方の話を伺って初めて知った。こうした試みが功を奏して、佐渡が更なる脚光を浴びることを願っている。

ところで、先に井上靖に触れた箇所で、佐渡守と渾名された新潟日報の記者のことを紹介したが、佐渡守と呼んでもいい人は他にもいる。相川生まれの郷土史家であり、佐渡博物館の館長を務め、数多くの佐渡に関する著作でも知られる磯部欣三なども、そうした人物の一人であろう。佐渡について詳しく知ろうとした時には、彼の著作のお世話になるしかない。私とは言えば、興味を持って読めそうなものだけを手にしてみた。『佐渡歴史散歩 金山と流人の光と影』(創元社、1972年)と『佐渡金山』(中公文庫、1992年)と先に触れた『世阿弥配流』がそれである。

読みやすいのかもしれないと思って気軽に手にしたものの、案に相違してどれもこれもとに

かく詳しいので、読むのにかなり難渋する。ガイドブックの体裁をとった『佐渡歴史散歩』でさえそうなのである。彼の佐渡に対する思い入れの深さがひしひしと伝わってくる。私は適当に斜め読みやつまみ読みしたい人間なので、余りに詳細な事実の列挙に途中で音を上げたくなる。「木を見て森を見ず」という諺があるが、彼が詳細に調べ上げた木を追っているうちに、著作の本筋である森がどんなものなのかが分からなくなってくるのである。もしかしたら、郷土史家とか地方史家と呼ばれる人に見られる一つの特徴なのかもしれない。

佐渡の金山について知りたければ、『佐渡金山』を紐解くしかないし、佐渡に流された世阿弥の佐渡での足跡を知りたければ、『世阿弥配流』を紐解くしかない。そう思って『佐渡金山』を眺めていて、次のようなことを知った。島送りが始まったのは田沼意次の時代であり、江戸幕府の崩壊までのおおよそ 100 年間続いたこと、鉱石を掘る大工や穿子（ほりこ）はある程度熟練した技術が必要であるが、地下の湧水を汲み上げる水替えであれば、腕力や体力があれば勤まるので、無宿者を水替人足に使役したこと、彼らのはじめは江戸市中で捕縛された無宿者に限られていたが、後には長崎や大阪の天領地からも送られるようになり、その数は 2,000 人を超えたこと、100 年間に 2,000 人だからそう多い数ではないが、この結果、常時 200 人近い水替人足を確保できることになったので、鉱山は随分助かったというのである。

更には、無宿人を何故流人なみに足かせや手鎖、腰紐を付けて目籠で送ったのかと言えば、見せしめにして「目懲り」の効果を考えたためであるらしいこと、それ故沿道の人々は無罪または軽罪の無宿人たちを「囚人」だと考えていたらしいこと、そうしたこともあって、ヤクザの「ドサ帰り」や芸能人の「ドサ廻り」といった言葉も、佐渡の逆さ言葉として生まれたらしいこと、そんなことも記されていた。

手元にある『大辞林』には「ドサ帰り」はないが「ドサ廻り」はあり、「①決まった劇場をもたず、もっぱら地方巡業をすること。また、その劇団。②盛り場などを歩き回る遊び人や与太者。地（じ）まわり。〔「どさ」は地方・田舎の意、「さど」の倒語で、賭博の現行犯が佐渡に送られたことから、など諸説がある〕と書かれている。佐渡は有力な語源の一つということのようなのである。

「佐渡版画村美術館」のこと

ところで、相川の町を巡っている途中で、佐渡版画村美術館の建物が目に留まった。一人旅であれば必ず覗いてみるどころだが、ここでは勝手な行動は許されない。調査旅行に連れて来てもらっている年寄りであれば尚更である。そう言えば、宿泊先のホテルの廊下にも毎年佐渡で開催されているという「はなが甲子園」の入賞作品が展示されていた。粒ぞろいの優れた作

品がたくさん展示されていたので、佐渡と版画にどんな繋がりがあるのか気になった。まず佐渡版画村美術館の方であるが、施設のホームページには次のようなことが記されていた。

故・高橋信一氏（版画家・高校教師）が指導した版画運動の成果を集めた版画専門美術館。高橋氏の遺作や佐渡在住アマチュア作家の作品を中心に約 300 点を常設展示。木版画・銅版画・シルクスクリーンなど多彩な版画に出会えます。

開館は 1984 年だから大分前になる。高橋信一（1917～86）についても何も知らなかったの
で、こちらについても調べてみると、彼は佐渡の両津高校で教師をすかたわら版画を制作し、
また退職後は佐渡を版画の島にするという思いで、島内の各地で精力的に版画指導を行い、「版
画村運動」を進めた人物として知られているとのことであった。彼は、農民や漁民による版画
制作と普及活動を通じて、過疎化に対抗する地域づくりをめざしたというのである。美術館が
完成して 2 年後には亡くなっているが、どのような場所にもこうした情熱的で魅力的な人物は
いるのであろう。

これを機に、『佐渡版画村作品集』（あすか書房、1984 年）を手に入れて眺めてみた。佐渡を
描いた土着的な作品も数多く収録されており、土の匂いや海の匂い、さらには佐渡で暮らして
いる人々の匂いが立ち上ってくるような作品集だった。風土や生活に密着していることから生
み出される、生命力溢れるエネルギーとでも言えばいいのであろうか。その素晴らしさに触れ
ていると、別な佐渡のイメージがゆっくりと浮かび上がってくるのである。

版画村運動の提唱者であり推進者であった高橋は、この作品集の冒頭で挨拶文を書いている。
それによれば、1982 年に版画村運動が「サントリー地域文化賞」を受賞するのだが、その副賞
の 100 万円を基金に、市長や地域の計らいもあって、旧相川地方裁判所の建物を利用して佐渡
版画村美術館がオープンすることになったのだという。

またこの作品集には、版画家として著名な萩原英雄が祝いの言葉を寄せている。彼は、各地
で作られている美術館は中央の美術館を小型化したものにすぎず、地方の特色を備えているも
のはほとんどないと述べたうえで、佐渡版画村美術館はそれに比して、中央ともまたプロフェッ
ショナルなものとも無縁の、地域に根ざした作品群が収められている点に特色があると指摘し
ている。

萩原が言うように、「これこそ、『地方の時代』の夜明けにふさわしい結実として、入れ物は
小さくとも、その意味は大きい」ということなのだろう。佐渡版画村美術館は、普通の人々が
制作した版画作品を数多く展示しているので、佐渡の人々に大きな力を与えたに違いない。高
橋信一についても、別の方が書いている。彼は島中どこのどんな人でもその名を知る名物教師
で、彼の美術教育に賭ける情熱とエネルギーはけたはずれのものだったと。

版画に賭ける彼の情熱は、「はんが甲子園」の実現にも結び付いていったのであろう。「はんが甲子園」のホームページには次のように記されている。佐渡が「版画の島」であることを初めて知って、私はまったく別の角度から佐渡に関心を持った。

『佐渡ヶ島』は、独自の文化と美しい自然環境を兼ね備えた国内最大の豊かな島です。古来より順徳上皇、日蓮をはじめ能楽の祖・世阿弥等文化人が多く流され、また江戸期から昭和期にかけては世界有数の金銀山が我が国経済を支えるなど、日本の歴史に大きく関わってきました。佐渡にはこれらの歴史の中で育まれた「佐渡おけさ」「鬼太鼓」「能楽」等の色々な郷土芸能をはじめとする独自の文化が色濃く残っています。また版画家の故高橋信一氏の指導により島内全域に版画文化が根付いた「版画の島」でもあります。

このように豊かな自然・歴史・文化を兼ね備えた当地は、文化的創造に適した島と言えます。当実行委員会では、全国の高校生の豊かな想像力と創作意欲の向上と、高校生同士あるいは地域住民との交流をとおして思い出深い経験をしてもらうため平成 12 年度より当地で「全国高等学校版画選手権大会」（はんが甲子園）を開催し始めました。

宿根木を探訪して

続いて、小木地区にあるの宿根木集落の探訪記を記しておきたい。相川を巡って翌日に訪ねたのが宿根木である。ここはどんなところなのか。宿根木のホームページには次のようなことが書かれている。ここに記されているような三つの文化圏については、青野も指摘しているので、かなり昔から言われてきたことなのだろう。

佐渡の文化は、俗に「国仲の公家文化」、「相川の武家文化」、「小木の町人文化」に大別される。国仲のそれは、中世の頃から配流の島となり、順徳天皇、日蓮、日野資朝、世阿弥など中央からの流人の影響で形成されたものである。相川と小木は、戦国時代から近世初頭にかけて、金山と廻船による商品経済への移行が佐渡を大きく変えて、金山直轄地の「相川」と廻船港「小木」を成立させた。

宿根木は、「小木の町人文化」形成に先駆けて、中世の頃より廻船業を営む者が居住し、宿根木浦は、佐渡の富の三分の一を集めたと言われるほど栄えた。やがて小木港が江戸幕府によって整備され、商業の中心が小木港へ移行すると（佐渡の金銀は小木港から運び出された一筆者注）、宿根木の者は、船主が船頭となり十数人の船乗りと共に、全国各地へ乗り出して商いを続けた。村には船大工をはじめ造船技術者が居住し、一村が千石船産業の基地として整備され繁栄した。その時代の集落形態が今日見られる宿根木の町並みである。村を流れる称光寺川と平行し、数本の小路が海へ向かい、それに面して家屋が肩を寄せ合い建っている。約 1 ヘクタールの土地に 110 棟の建造物を配置する高密度である。建物の外壁に船板や船釘を使ったものもあり、千石船の面影をしのべる。宿根木集落の特徴は、家屋の密集性にある。

宿根木にいた船頭たちは、初めは小さな中古船を入手して船持ち船頭になり、船を大きくしつつ資金を蓄えて新たな船を造るまでに成長していく。海運力をつけた船頭たちは、春に大阪に上り、秋に北海道に下るという「北前稼ぎ」に進出していくことになる。こうして江戸後期

の宿根木の海運業の姿が完成するのである。このような展開は、北前船の寄港地となったところはどこも似たようなものであったろう。そこまでは同じようなものなのだが、違いが生ずるのは歴史的な遺産の保存状況である。

北前船で財をなした豪商の館跡などはあれこれの所に残されているが、宿根木のように集落全体が当時の面影を残しているところはそうはない。われわれは今回の調査旅行で富山市の岩瀬地区にある森家を見学した。この森家は北前船の廻船問屋で、国の重要文化財に指定されている。行きも帰りも荷を載せて「倍倍」に儲かることから、地元では北前船のことを「パイ船」と呼び、往復で儲かるので「のこぎり商売」とも言われたらしい。何ともユニークな表現ではある（笑）。

残されている家屋や蔵は、北前船による蓄財がもたらした立派なものであり、岩瀬地区も落ち着いた町並みに整備されていた。風情も感じられるのだが、しかしそれ以上のものではない。次次の流れに浸食されているために、往時にタイムスリップしたような感じが余りしないからなのかもしれない。館長の名調子の説明も何とも手慣れ過ぎているので、私などは素直には聞けない。笑いを取ろうとの思いが強すぎるのであろう（笑）。

こうしたところと比較してみると、宿根木の良さが際立ってくる。小さな集落であるが、そこを気儘に歩いてみると何とも言えない郷愁に誘われるのである。この宿根木が、昔廻船業で栄えたところであったとはにはわかには信じ難い。狭く入り組んだ道路とも呼びびたい路地、びっしりと並んだ板張りの古い家々、瓦や石を載せた家並み、そのどれもが懐かしく感じられた。こうした集落のありようもまた意図して作られたものであり、自然のまままでなどあるはずはないのに、作られていることを余り感じさせないところが宿根木の良さなのであろう。もしかしたら、旅情が冷静な観察眼を曇らせていたこともあったのかもしれない。

取り残された集落であった宿根木が、突然時代の脚光を浴びるようになったのは、この集落が「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されてからである。それ以来、古い景観を維持し再現するために、さまざまな補修や改修工事が行われてきているのだという。観光客は従来からあった町並みに歴史を感じ、昔の面影を探すようになるのであるが、今度は集落の方もそうした観光客の眼差しに寄り添う形で、過去の姿に町並みを変えているようなのである。

観光シーズンともなれば、日中は狭い路地に観光客が溢れ返るとのことであるから、宿根木に懐かしさを感じた私などは、さだめし観光客の眼差しで宿根木の表面を撫で回しただけの存在であったに違いない。この辺りのことに関しては、博物館で入手した『宮本常一写真で読む佐渡』の①「マスツーリズム」と、②「観光以降」の2冊の冊子に収録された宿根木関連の論文を目にして、あらためて気付かされたことではあるのだが…。

「佐渡国小木民俗博物館」と「白山丸」展示館から

この宿根木では、佐渡国小木民俗博物館とその隣に併設されている「白山丸」展示館を見学した。民俗博物館は、佐渡ゆかりの民俗学者である宮本常一の提案と奔走によって設立された。建物は、大正9年築の旧宿根木小学校を利用している。主に民俗資料を展示しており、南佐渡の漁業や懐かしい暮らしのアイテムなど、その数は30,000点にも達しているらしい。

もっともこれは展示されている数であって、蒐集されたものは5万点とも7万点ともいう。未だに全体の整理はついていないようで、すべてが展示されるには至っていない。博物館の奥には別館が建てられていたのでついでに覗いてみたが、そこにも未整理の民俗資料が所狭しと置かれていた。なお、展示されているもののうち、南佐渡の漁撈用具1,293点と船大工道具1,034点は、国の「重要有形民俗文化財」に指定されている。

博物館に併設された展示館では、実物大の千石船「白山丸」を見ることができる。安政5年（1858年）に宿根木で建造された「幸栄丸」を、当時の板図（いたず）をもとに復元したものだという。縮尺された千石船は何度か見たことがあるが、この「白山丸」は日本初の完全に復元された原寸大の千石船であり、展示館でその威容を誇っている。外観は勿論だが、見学者は船の内部にも入ってすべて見ることができる。年に一度、地元の人々の協力によって展示館から前の広場に引き出し、155畳の大きさの帆を張って展示しているのだという。

博物館で入手した「白山丸」友の会によって作られた冊子『時代に帆を揚げて』（2004年）には次のようなことが書かれていた。なお、ここに出てくる水主は「かこ」と読み、「か」は梶「こ」は人の意味で、江戸時代には下級の船員を指していたようである。

全国的にみると弁財船関連資料の保存されているところは少ないが、宿根木には残っていた。かつては、船主や船頭をやった家にはどこでも家ごとに仕切帳、造船資料、海難や航海文書などを所有していた。それが戦中、戦後の紙不足で便紙にしたり、新築などの機会に焼却している例が多い。

宿根木は、弁財船の船主、船頭、水主（船員）など海運に従事した人たちだけでなく、船を造船、修理する船大工、鍛冶屋、桶屋、家大工などがいた総合海運業の村となっていたため、資料も多いはずだが、これらの資料は戦後、不用になって捨てられ始めていた。処分がすすんだ最後のころ、緊急に集め大量に収集、保存できたのは宿根木小学校が廃校になり、この空き校舎を博物館にした林道明館長と中堀均さんがいたからであった。

完成に至る間にはドラマティックな展開もあったようで、ある家の屋根裏からびっしりと並んだ船大工道具を発見したのは、宮本常一に連れられて民具と民家の調査に来ていた武蔵野美術大学の学生たちであったという。その家の主人は元船大工で、彼は先の林、中堀両氏の良き理解者でもあり、千石船の復元の提唱者となったのだという。また、地元の有志が千石船の建

造で知られた岩手県大船渡市を訪ねるのであるが、そこで「白山丸」建造の指揮をとることになる船大工の頭領と出会うことになる。こうして、1998年に千石船「白山丸」は完成するのである。

宮本常一が民俗博物館の設立に尽力したことは、先にも触れたところであるが、宮本と佐渡との関わりはきわめて深い。佐野眞一の『宮本常一が見た日本』（ちくま文庫、2010年）を広げると、「故郷の周防大島を除いて宮本に一番縁の深かった島は佐渡である」と書かれている。彼が初めて佐渡に渡ったのは1958年だとのことだが、その後20年の間にこの島に彼は30回以上も足を運んだのだという。大変な入れ込みようである。佐野によれば、「宮本が佐渡に残した仕事のうち代表的なものは、小木の小学校廃校跡を利用した佐渡国小木民俗博物館の設立と、羽茂における八珍柿の増産奨励の二つである」という。宮本の博物館に対する関心は、次のようなところにあっただろう。

小木に民俗博物館をつくるのを急いだのは、一つには、京都の古物商たちが昭和三十年頃から小木の町に入りこみ、旧家にある民具類を安い値段で片っ端から買い漁っていたことと、昭和三十年代後半から四十年代前半にかけて小木の町に新築ラッシュが起き、民具類が廃棄される可能性が高まっていたためだった。北前船の関係で小木には貴重な民具類がたくさん集まっていたが、それが裏目に出て小木の人びとは高価な古伊万里をネコのエサ皿に使うような暮らしを平気でしていた。しかし、もう一つの理由の方が宮本にとっては切実だった。宮本は民俗博物館をつくることで沈滞した小木の町の空気をなんとか打破しようと考えた。

古い民具が家のどこにあるかを一番よく知っているのは家庭の主婦である。ところが主婦はその使い方を知らない。知っているのは老人だ。けれど老人にはそれを運搬するだけの体力がない。それを運ぶのは若者だ。民具をただ集めるだけならば骨董屋と同じだ。博物館づくりは老若男女の力を結集することだ。人びとの力を結集することによって、沈滞した地域に活力と自信を与えることができる。これが、宮本の博物館づくりの持論だった。宮本はこの持論をもって、小木じゅうをアジテートして歩いた。

博物館が出来上がるにあたっては、宮本を心の底から信奉する先の二人の人物、すなわち称光寺の住職であった林道明氏と町役場の職員だった中堀均氏の協力があった。林氏は宮本に会うなり、「聞けばどんなことでも答えられる宮本の該博な知識と、まったく偉ぶらない人柄にすっかり魅了された」らしい。中堀氏も「初対面ですっかり宮本の心酔者」となると書かれている。アジテーターのアジテーターたる所以なのであろう（笑）。そうした人と人との出会いが佐渡国小木民俗博物館に結実していくのである。

旅の終わりに

余りにも長々と駄文を連ねてきたので、この佐渡紀行もそろそろ稿を閉じなければならない。

閉じるに当たってなんとかまとめになるような文章を記したいと思ったのであるが、それがなかなか浮かんでこない。何とも困ったものである。雑文の宿命のようなものであろうか（笑）。仕方が無いので、自戒も込めてここでも宮本常一の文章を拝借することにした。彼には全15冊にも及ぶ『私の日本地図』（同文館）という著作があり、その7巻目が「佐渡」（1970年）である。そのあとがきに次のように書いている。

佐渡へ観光客をもっとたくさんつれて来るには接客のための女を入れなければいけないと言っている島の人が近頃は多いそうである。そんなことをしなくても明るく健康な島にしたいものである。（中略）自分たちの島だから、島民全体の住み心地のよいところにならねばならぬ。媚びを売るのは都会の人の仕事にしておいて、島民は素朴にはつつとして胸をはってあるく方法を考えるべきではないかと思う。それが島の外の人たちのつよい魅力にもなるのである。佐渡はよい島である。そこにしっかりと根をおろして生きている人もりっぱである。その人たちが主体になることが大切である。

今回の佐渡紀行は、ロマンチストなのにリアリストであり、リアリストなのにロマンチストでもあった宮本に教えられた旅だったのかもしれない。そうした思いがさらに強くなったのは、『宮本常一 旅の手帳 <庶民の世界>』（八坂書房、2011年）に収録された二つのエッセーにも触発されたからである。1964年の「佐渡の八珍柿」と1967年の「佐渡人のくらし」がそれである。

私の見たいのは名所旧蹟や風景のすぐれているところでもない。田や畑や雑木林や住居や道や、人びとの生活しているさまである。その土地に人はどんなにして住みつき、どんなに生きてきたかを見たい。

佐渡の人は勤勉である。ただ働くだけではない。勉強もよくする。この島には高校だけでも六つあって、たいいていの者が高校は出ている。同時に島の外へも流れ出る。そのためにも高校を出ていなければならぬと皆考えている。島にのこっている者は何とかして島をよくしようとして一生けんめいであるのだが、写真家たちは佐渡のうらぶれたところばかり写真にとりたがってやって来るそうである。町の人たちは島を海のはてのさびしいところと人にも思いこませないと承知しないようだと言った島の識者は苦笑していた。

筆者のような都会からの来訪者などは、島の識者に苦笑される存在であるに違いない。物見遊山とまでは言わないにしても、それにかかなり近い観光客に過ぎないからである。だからこそ、地元で生きる人間を見ようとして歩き回る宮本の姿勢から、改めて学ばなければならないのであろう。そしてまた、彼のバイタリティーの在処を探してみなければならぬのであろう。目に見えているものの奥に息を潜めている何ものかを全身で感じ取ろうとすること、もしかしたらそこにこそ旅の極意はあるのかもしれない。旅に出掛けた年寄りに求められているものは、そうした極意に少しでも近付くための、落ち着きのある眼差しなのではあるまいか。